



国際情報

INTERNATIONAL & INFORMATION

新潟国際情報大学広報 第4号

〒950-2292 新潟市坂田字カタハタ46番地1 tel 025-239-3111 fax 025-239-3690 E-mail somu@nuis.ac.jp ホームページ http://www.nuis.ac.jp

文科と理科

石川 真澄



私たちの新潟国際情報大学は一つの学部のみならず文科系と理科系の学科が一つずつあるという大学です。以前ならたいへん珍しいと言われたかもしれませんが、近ごろは総合科学といった視点から、あるいは教養部をなくした結果として、あえて混在させる大学もかなりあります。

文科は演習や実習がなく、講義なんか聞かなくても本を読んでもいい、しかし、理科は忙しくて遊んでられない、——といったことが、どの大学でも学生の間で通用しています。また、就職すると、自分の出身学科以外の人に対して「あいつは理科（文科）だから」話を通じないと嘆いたり、時には同じ会社のなかでひどくいがみ合ったりすることがあります。文科と理科はそんなに違うのでしょうか。

ここで私の個人的な経歴をお話します。私はもう四十年前も前に小さな工業大学を五年かかってやっとなり卒業しました。ところが、卒業すると新聞社の記者になってしまったのです。それも政治記者

などというものです。そして記者生活をしている間ずっと、「あいつは理科だから」と言われ続けられました。数字を使った選挙分析などを見ると、ひとときそういう批評が多く出ました。数字といっても四則算法しか使っていないのです。

私に言わせると、大学にいたのはわずか五年（今は工学系では修士課程まで六年の場合が多いようですが）に過ぎません。その後、政治記者を三十年余もやっています。文科も理科も、へつたくれもあるかい、という気分でした。

私のような者はそれでも変わっているとわかっていても仕方がないかもしれませんが、世の中には大学の理科系学部を出たけれど、会社の管理部門を長くこなし、社長になり、ついには財界の首脳になったなどという人は珍しくありません。理科出身の経済官庁アナリストや、医学はただから有名な評論家になった人もいます。文科系でいながら宇宙開発やサル学、脳死などについて専門知識を得て立派な本を出した人もいます。

一方、二〇世紀はある意味で自然科学とその応用の時代でした。そのため、文科系といわれる研究者たちの間でも「科学としての」政治学とか経済学とかが目標とされる傾向がありました。それらが個々にどんな成果を挙げ、どんな失敗をしたかはともかくとして、結果的にそれは文科と理科との壁を低くしたと私は思います。

おそらく大事なことは文科か理科かの違いではなく、両者がともに「疑の世界に真理多し」（福沢諭吉）という知的世界の根本認識を共有したうえで、協力して市民社会をつくっていくことではないかと私は思っています。



目標のある人生を

広報委員 正田 達夫

第一回卒業生諸君、卒業おめでとう。

卒業式は、英語ではCommencementと言って「始まり」の意味があります。多くの諸君は一般の企業に勤務することになり、学生時代とは異なった環境の中での生活が始まります。

そこで、約四十年間ビジネスマン生活を過ごして来た先輩として、「楽しい、生きがいのある生活」へのヒントを提案させて頂きたい。まず、人生は目標へ向かってのゲームであるということです。ゲームですから職場ごとに種々のルールがあります。このルールは、業界・職場ごとに異なるから、早くその職場のルールを、経験や失敗を通して学ぶことです。聞くは一時の恥といわれます。先輩・上司にどんな質問し、早くそのルールを体得することです。しかし、これまでの方法やルールに従っているばかりではつまりません。何か新しいことを企画し、提案してこそ生きがいがあります。大切なことは、自ら目標を立てて、その目標達成に挑戦することです。目標は、三つの領域で立てるのです。まず第一は、仕事の目標です。最初の一年は、組織の歴史や環境の変化を学び、その中から、問題を見つけ、改善提案を準備しましょう。この大学で学んだ事を活用しましょう。より深く調査・研究する必要があるれば、先生方に聞きに来ればよい。先生方は喜んで相談に乗るでしょう。短期的なその年の年の目標とともに、五年先、十年先の目標を立てて準備・勉強をしましょう。そこで第二の目標は、学ぶことの目標です。折角多くの時間をかけて書いた卒業研究のテ

ーマについて、或いは新しいライフワークについて、一月に最低一冊の専門書を読み、専門の雑誌を定期的に購読し、最新の技術・知識をフォローすることです。ある領域についてのエキスパートを目指し、このことでは、社内でも勉強し、なにか有れば、相談にのれるように勉強を続けることです。第三の目標は、リクリエーションの領域です。リクリエーションとは、「recreation」再び創造するから来ています。人間性を取り戻す場です。遊びのあること、趣味が人生を豊かにします。例えば、スポーツでも、音楽でも自分の好きな道で、具体的な目標を追究することです。自分の好きな道は学べば学ばほど、楽しさの奥が深くなり、喜びも増すことでしょう。人は誰でも人生を楽しむことが出来ます。夢・ビジョンを持ち、そのビジョンを達成する目標を、一年ごと、一月ごと、さらに、週別・日別に立て、その目標を毎日達成するとき、人生は達成感に満たされ、喜びの日々となることでしょう。

諸君が、三つの領域で、自ら計画を立てて、その目標に向かってチャレンジすることを期待しております。



就職活動を通じて

會田研究室 桑原 信弘

私は大学生活の中で一番就職活動が心に残っています。というのも、全てが皆と同じように初めての経験であり、また今までと違い全て自分で決めて行動しなければならず、楽しいことや苦しいことを経験しました。

様々な人と出会い、色々な人の意見を聞き、自分の考えを持つことができたと思います。私が就職活動を通じて学んだことは、いつも前向きに物事を考え行動すること、自分で答えを出さなければならないことです。就職先を決めるのは大学ではなく自分なので、全ての責任は自分にあるのだと思いました。就職活動ばかりではなく、これからの人生は自分のやる気次第だと思いました。本当にこの会社であれをこつしたいという気持ちがあれば、それは自分の考えや行動にも表れるし、面接とかでたとえうまく話せなくても、気持ちは伝わるはずですよ。

これから私達四年生は社会人になるわけですが、私は会社で働かされていると考えると、会社を動かしていると考えたい。常に明るく前向きに、あらゆる部分で自分の可能性を試したい。

ゼミ合宿

赤木研究室 畑田 智子

私たちは、昨年十月末に「泊三日の日程で、卒業研究を進めるための合宿をしました。なぜか私は先生から幹事を命じられ、ゼミの度に「合宿はどうでしたか」と質問攻めにあい、私を含めてみんな、合宿に行くのは気が進まないというのが本当の気持ちでした。

当日、待ち合わせ時間に一時間以上遅れた人がいたり、季節はずれの雪が降ったりして、一体どうなることかと不安でした。宿もまだ暖房の準備ができておらず、震えながら座布団を抱えてゼミをしました。

終ってみれば、あつという間の三日間でした。後半は合宿の目的を先生孝行へと変え、しばし観光旅行を楽しみました。

この合宿で、ゼミの人たちとの交流を深めることができ、先生のやさしさと親しみやすさを感じ、また、卒業研究完成への意欲も高めることができ、大学生活の楽しい思い出の一つとなりました。先生にとってもよい思い出となったらよいのですが。

楽しいバレエ部

明石研究室 金子 幸江

あなたが大学生活で一番、力を注いだのは何ですか？

これは、就職活動をしているとよく聞かれる質問です。私ならこう答えます。「バレエ部の土台作り」に力を注ぎました。」

私の大学生活、振り返れば色々な事がありました。4年間のごを切つても、バレエ部と共にいたように思います。大学に来てまで倶楽部活動なんて...と大抵の人は言うでしょう。私も以前はそう思っていたんで

す。でも、3年前は空き時間さえも苦痛な程につまらない毎日で、気晴らしに始めたのがバレエ部でした。活動がスターとして1年、友人に「バレエ部って仲いいよね。」と言われ、すごく嬉しかったのを覚えています。ずっと「楽しい部活」をモットーに歩んできて、そのために辛い壁にぶち当たったこともありましたが、私も自信をもって言えます。4年間、バレエ部を守ってきた良かった。

あなたは今、何に力を注いでいますか？

語学研修のススメ

明石研究室 小柳 貴之

後輩のみなさんには、是非在学中に外国に行って勉強して欲しいと思います。私は英語を選択していたので英語圏の国に行きたいと考えました。また流通に興味があり就職先も流通だったことから、勉強もかねてスーパー・マーケットの発祥の地であり流通の先端を行くといわれるアメリカに行くことにしました。アメリカで一カ月間語学学校に通い、英語を磨くだけでなく、人間的にも一回り大きく成長してくる目論見でした。しかし、実際アメリカに行ってみると英語が聞き取れないしうまく表現できない、そして授業でさまざまな質問をされても答えられず、知識のなさを痛感させられました。

私はこの経験を通じて自分自身の未熟さに気付くことができました。もしアメリカに行かなかったら、自分の知識のなさに気付くこともなく、もっと勉強しなければならぬという意欲を持つこともなく、ただぼんやりと生活していたように思います。

四年間で得たもの

池田研究室 上原 淳事

気が付けば高校を卒業してから四年間もの時間が流れていました。この四年間は、本当にあつという間でした。四年間で私が得たものは知識はもちろんですが、やはり何より自律心です。大学では、とにかく自分が何事も判断して行動しなければなりません。自分の行動に責任を持つということは本当に大変なことです。しかしそれが私自身を大きく成長させてくれました。今までどちらかというと何事にも消極的な性格でしたが、大学に入學してからは、以前よりずっと積極的に何事にも取り組むことができるようになりました。こうしたことから努力をして手に入れた成功という感動も、身をもって学ぶことができました。大学生活を太きなキャンパスに例えるならば、入学当時、真っ白だった紙に、次第に友達という色が塗られ、知識という色が塗られ、悩みという色が塗られ、他にも様々な要素の自分だけの色が塗られ、次第に自分だけのオリジナルの絵を描いてきた、そんな気がします。その絵は決して完成することはありません。なぜならその絵は、今後様々な経験を経て無限に広がってゆくからです。どんな絵にするかは、みんな一人一人異なる訳です。このように大学生活は、私の生き方や考え方に大きな影響を与えました。知識を学ぶことは大切ですが、私はそれ以上のものを得ることができました。そしてこれから自分のキャンパスに自分の色で絵を描き続けたいと思います。

就職活動

石川研究室 鈴木 裕生

立春も過ぎ、後期試験も終わったというのに辺りはま

だ雪景色です。

思えば私は公務員を目指し、二年の頃から試験勉強をはじめました。試験勉強を就職活動に入れるのなら、約一年間も就職活動をしていたことになります。我ながらよくやったと思っています。おかげでなんとか希望の職種につくことができました。

いま振り返ってみると、本当にいろいろなことが思い出されます。試験勉強の仲間と試験範囲の広さや難しさをばやいたことや、模試で合格範囲内の判定が出たときのうれしさ、そして何より、試験に合格し希望の職種につけたときの感動は忘れることができません。

最後に、就職活動にあたり至らない私を叱咤激励してくださった友人や先生そして就職課の方々に心から感謝いたします。ありがとうございました。

人と出会い、言葉と出会う

市岡研究室 黒山 貴子

モスクワ発ウラジオストク行の飛行機に乗る日のこと。一カ月半分の荷物と思い出のつまったスーツケースは制限重量を超えている。窓の外を眺め、ぼんやりすすす私は、まだ超過料金を払っていない。自分が握り締めているのは紙切れで、搭乗チケットではないことに気付くのは、ゲートが開いて、乗客がバスに乗り込み始めた頃だった……。

その後は、噂に聞くロシアの事務手続きに振り回され、いったい何人の口からこの言葉を聞いただろう。「それはこの窓口ではなく」と。

ようやく、情けない私の姿を見つけた男の人が、料金を精算してくれた。彼はチケットを差し出し、私の背を押した。そして後ろから大きな声をかけてくれた。

四年間というわずかな時間の中でも、多くの人々と出会い、彼等から多くの言葉を受け取ってきた。どこで誰と出会い、誰のどんな言葉が自分の支えとなるかはわからない。ただ、確実にいえるのは、これまで出会った人々と彼等の言葉のおかげで、今ここに私はいる。

何もかもうまくいなくて、何もかも投げ出してしまおうとすると、今でもあの声が聞こえてくる。

『Дорожка барщину! (お嬢ちゃん、急ぐんだ)』

私の金メダル

臼井研究室 楯山 舞

私がこの原稿を書いている今日も、嬉しいニュースが次々と耳に飛び込んでくる。今世の中は、長野オリンピックの話題で溢れている。

先日金メダルに輝いた、スピードスケートの清水宏保選手は、こう語っていたという。「このメダルにふさわしい人生を送りたい」と。ならば、今の私にとって、その「メダル」に値するものは何かと考えてみた。そしてそれは、ここ新潟国際情報大学で過ごした、最後の学生生活という「時間」である、という結論に至ったのである。

私は、お世辞にも真面目な学生ではなかった。だから目に見えるものとしては、中途半端に終わったものが多い。後悔も残る。しかし、目に見えないものとして、4年の歳月は、あらゆる物事をあらゆる角度から、ゆつくりと、また深く見つめる時間を与えてくれた。そのお陰で私は、少しでも成長した自分を認めることができたのである。この学校で得たメダルを胸に、これからの道を進んでいこうと思っている。

厳しかった通学路

内山研究室 山田 美和

私の、4年間の大学生活で一番印象に残っていることといえば、やはり冬の赤塚駅から大学までの道のりです。私は4年間電車通学だったのですが、その中で特に冬がひどかったのは2年生の時だったと思います。その時は赤塚駅から大学までの道は、今のようなまっすぐな道ではなく、まわり道をしなくてはならず、しかも歩道が途中からなくなって、路肩を歩いていました。ひどいのはなんといっても風でした。大学へ行く時はたいへん向かい風で、いつも息がでないくらい強く吹いていました。大学に着くと息切れしてしまいました。これは決しておおげさな話ではありません。私は新潟に生まれ、風の強い海の近くで育ちましたが、あれほどの風には出会ったことはありませんでした。あの2年生の時のようなひどい冬は最近ありませんが、これからの新しいことを電車通学をしている方々のためにお祈りしています。

ゼミ合宿

浦研究室 青海奈津美・高橋 幸子

9月1・2・3日の泊泊3日で、私たち浦学部長ゼミは福島へ合宿に行きました。勉強はもちろんのことですが、古い文化になれ親しみ、ゼミ内の交流を深めることが一番の目的でした。合宿前から行なったゼミ発表会の下準備で疲れ、当たり前のことながら合宿でも勉強と思うと気が重かったのですが、それを観光という形で息抜きすることができました。鶴ヶ城・五色沼の見学と3日間のゼミ発表会、また夜はクアハウスにあるプール・ジャグジーなどでリラックスし、とても充実した3日間でした。良い場所（環境）で合宿で

きたと思います。宿泊先はリステル猪苗代で、きれいなホテルでおいしい食事（特に2日目のフランス料理は絶品でした）。は、ゼミ合宿には似合わない環境ですが、私たちにとっては気持ち良く過ごせうれいことでした。

3日間の合宿を終え、ゼミ内の交流も深まり、最後の夏休みの大切な思い出となりました。

学生生活を振り返って

區研究室 水田 義和

正直なところ、あつという間でした。しかし、たくさんのご経験し、そこから得たものは非常に大きいです。NUSでの私の収穫は、情報技術と国際感覚を身につけたことだとは、残念ながら言えません。私の収穫は、外国語での国際交流を経験したことや兄弟のように返屈な友人ができたことです。私は、入学当初よりも視野も広がり、心が豊かになった、人として成長したと思います。

これは、NUSには良い環境、特に熱い「ト」がいたからだと思います。私にとって刺激的でしたし、大きく影響を受けました。現在の環境に十分満足しているとは言えませんが、外国を身近に感じるようになったことだけをとりまいても、新潟までやって来た価値はあったと思っています。

終点でもあり起点でもある卒業を迎え、多少の未練を感じますが、後悔はありません。NUSでの4年間で学んだことや得たものに自信を持ち、「我よりいにしえを成す」くらいの心の勢いで、今後突き進みたいと思います。

第一期生であるということ

大山研究室 山田 雅美

私たちは新潟国際情報大学の第一期生だ。当初は、入学式の日に様々な団体からの勧誘の声やポスターがなかったこと以外は一期生だということをさほど意識させられなかったものだ。

何かが新しい大学なので、学風もこれからつくられていくわけだ。私は、最初は深い意味もなく友人達と学友会という組織をつくっているうちに、だんだんと新しい大学に少しでも足跡を残したいという気持ちになっていった。

一年目の学園祭。なぜ今やりたいのかなど、色々ときかれながらも、「初年度からやらなければ意味がないです」「後々、代表的大学行事として残したいんです」と言っているうちに、はじめはお祭気分からやるようになっていたのが、真剣にそう考えるようになっていた。

部活動の結成はじめは、何もないのだからとりあえず仲間同士で楽しくやればよいと考えていたのだが、クラブが次々に生まれてくると、もともと大学の伝統となるような団体にできたら……などと思うようになっていった。

こんな風に思ったのはざっと、二期生だからだろう。伝統のある大学で、年間行事もクラブもできあがっていたらそのルールの上を何の疑いもなくに進んでいったらう。何も無い状態だったから、一期生だから、大学をこんなふうにしたら、あんなふうにしたらと考えた機会があったのだ。

学園祭は四年間連続で行われた。部活動やその他の団体も、後輩達が盛り上げていくところにいるようだ。きれいではないにしろ、新しい大学に少しでも足跡を残せたような気がする。そして、そのことから、大学をより身近に感じ、母校だという感覚を強くもてるのか

もしれない。

一期生でよかった、と思う

越智先生との出会い

越智研究室 井塚 みのぶ

4年間の大学生活をふりかえってみて、私はこの大学で多くの事を学びました。すばらしい友人と先生方に出会えたことが私の4年間の大学生活を大きく変えました。周りの環境に恵まれたことで、私にとってかけがえのないたくさんの物を手に入れることができました。越智先生との出会いにより、それまで私自身の中の霧のようにあやふやなものが一つの形として明確になったのです。それは、卒業研究のテーマでもある性差別に関する研究です。先生と様々な観点から話し合い、お互いの意見をぶつけあつて、私の中にかかっていた霧が晴れた青空のようになったのです。新潟国際情報大学に入り、自分の目的を発見し、周りの人達から多くの事を学んだ大学生活は、有意義でありすばらしいものだったと思います。大学生活から得たことを忘れず、そして自分の研究テーマをさらに勉強していきたいと思っています。

素晴らしい仲間達

片山研究室 小竹 靖子

第一期生として入学した私達4年生は、1期生だけにしか経験できないことを数多くしてきたと思います。大学生生活というものに憧れと夢をいだいていたものの、現実とのギャップにがっかりしたこともありました。しかし、一緒に苦労したり笑ったりした仲間とは、これから先の人生でも、未永く付き合っていけそうです。私の場合1・2年生の頃、部活動の運営で苦労が

ありました。そのとき、ともに苦労して、乗り越えた仲間のことは、これから先も忘れることはないでしょう。また、苦労したことがあって、素晴らしい後輩をもちこたえました。先日、後輩から卒業祝にプレゼントをもらいました。4年間の思い出とともに大切にしていきたいと思います。

NIUSで得た一番大きなものは、素晴らしい仲間です。皆、個性的でした。私は決して世間でいう真面目な学生ではなかったかもしれませんが、居心地がよかったです。一緒にいて楽しい人間がたくさんいました。皆、それぞれの人生を楽しんでいたかと思ういます。

蔡ゼミで学んだこと

蔡研究室 柳 伸一

新世紀を目前に控えた国際社会のなかで、私たち蔡ゼミは「既学文問」をモットーに日中両国の文化および思想の相互理解の歴史を踏まえつつ、近代日中関係を研究理解してきました。異文化理解は自国の文化を理解することが前提としてありますが、しかしまた他者を知ることが、逆に自己を知ることにもなりえます。

ゼミは、個性豊かな12名により構成され、政治・経済、文化等を各自のユニーク且つハイスセンスな視点で曖昧な態度ではなく真摯に研究に取り組んできました。また、蔡先生は国や文化の違いといったものに拘束されない方で、中国語履修者でなくても、中国への関心があればゼミへの参加を積極的に受け入れています。4年時は、卒業論文や就職活動で最も疲れた1年間でしたが、蔡先生の時折繰りだすハイコロリティーな洒落のおかげでリフレッシュして、明朗快活に過ごすことが出来ました。

後輩に一言

佐藤研究室 笠原 裕介

私はこの4年間の振り返りかえつてみると酒を飲んでばかりいたような気がする。これではとても充実していたとは言えない。私にとってこの4年間は楽しかったが、納得いく内容ではなかった。まだ学生の後輩諸君は学生の間だからこえてできる事をたくさん経験した方がいいと思う。内容の薄い4年間の過ごした私には、まだ時間が残されている学生達がとても羨ましい。

大学生活4年間の振り返って

澤口研究室 横野真理子

4年間の大学生活はあつという間でした。この大学に入学した当時は私たちの学年しかいなかったため、校舎は広く感じられ、大学周辺も現在のように整備されていない状態でした。それから4年の月日が流れ、全ての学年が揃い、ようやく大学らしくなった気がします。

私にとってこの4年間で最も大変だったのはやはり卒論です。私たちのゼミでは研究テーマに基づいたフィールド調査が重要だったので、1年程前からデータ収集を行い、準備してきました。しかし論文の執筆はこのような短期間では難しいということ身を以て体験しました。また卒論の締め切り前日には語学のテストがあり、それらを両立するのに苦労しました。

しかし、私は4年間の大学生活でかけがえのない友人と出会うことができ、この大学に在学できて本当によかったと思います。

人と人のつながり

正田研究室 渡辺 博之

私が大学生活の中で学んだことは、「人と人のつながり」これに尽きます。アルバイト先で一つひとつ仕事をしているうちに不思議とそのつながりがふくれ上がってきました。例えばアルバイト先のホームページを作ったり、一部門長として仕事をしているうちにそれが取引先の企業の目に留まり、その結果、春頃には就職が決まりました。また、その技術が認められたところある企業の顧客データベース作りを依頼されたり、学外実習先からもうちに来ないか？と度々声をかけられるなど、多くの人からよくしてもらっていて、今でも良いつきあいをさせてもらっています。

自分が何かを探しているときにそれを誰かが助けてくれる、そして誰かが何かを探していたら自分から進んで助けてあげる。私はこんな関係がとても好きです。「あの人に信頼してもらったから大丈夫だろう」という当たり前のような信頼関係ですが、時には本当の信頼関係とはどういふことなのかということをつくりと考えると、そんな学生生活でした。

楽しかった大学生活

高木研究室 石井 亘

4年間の大学生活が無事終わろうとしています。その感想を言葉で表現するならば、「楽しかったなあ」の一言につきま。第一期生ということで、講義、部活・サークル活動等何を行うにしてもこの大学において最初の学生となり、緊張感のある学生生活が送れたからです。また、部活・サークル等を通して多くの友人、知人と巡り会い、4年間苦楽を共に過ごすことができたこともその要因の一つです。

次に、学生生活で印象に残っている出来事を幾つか挙げると、講義では、先輩がいないことから受けてみるまで講義内容が分からないという他の大学では味わえない緊張と楽しさがありました。部活動では、学園祭等の行事において、フィットネスコンテストの開催等、今までにない貴重な体験を多く得ることができ、充実した活動だったと言えます。

最後に、多くの友人に巡り会い、共に学生生活を楽しく過ごせたことに、両親、先生方、職員の方々に深く感謝いたします。

思い出を語る

高瀬研究室 長沼久美子

この大学の思い出といえば、「冬」のことめきには語れない。後期のテスト時期は必ずと言っていい程猛吹雪で、やつこのことで大学に着いたのに「休講です」の一言で片付けられたことが何回もあった。電車通学の私には、あまりにも無情な言葉だった。後輩のためにも大学側に今後の改善策を期待しよう。

あと、真夏にスーツを着て汗だくになりながら就職活動したことも忘れ難い。気らくなTシャツ姿の学生のままでいたい、と思いながら会社に着て運んでいたのは、もう昨年のこと。ああ、時が過ぎるのは早い。

この大学に通って本当にいろいろなことがあったけれど、最後に人との出会いについて一言。この大学はいい先生が多かったし、美智子、悦子、久美子、百恵という友達もできて、人との出会いには最高に恵まれていた。だから今はしみじみこの大学に来てよかった、と思える。真冬・真夏の思い出も含めて。

新潟国際情報大学よ、ありがと。ここに幸あれ！

友達ができた

高橋研究室 富沢 利恵

私がこの4年間で得た一番大切なものは、何といっても友達である。大学に入ったばかりの頃は、気のあう友達ができるかとても不安であったし、「きつと4年は長いだろう」と思っていた。しかし、今になってみると4年間はとても短かった。その間に「お前は何をやってんだ？」と聞かれたら、大したことはしていないが、私にとってはいろいろな人に出会った貴重な時間であり、その関係を深めた時間であった。そしてその中で、様々な考え方があったことを知った。また自分自身が客観的に見てどういう人間なのかを知ることができた。自分をより理解するためにもよかったと思う。

4月からは友達と離れて、また新しい道に進むことになる。でも、これからもお互いが支え合ったり、励まし合える友達は私は作れたと思う。

NUISSで学んだこと

竹並研究室 久保田直也

私は、コンピュータについて学ぶことができそうだなと思い、本学の情報システム学科を選び入学しました。入学以前には「情報システム」という言葉に触れたことはなかったと思います。

多くの講義で、情報システムは企業にとっては勿論のこと、これからの情報化社会の中では大変重要なものであると学びました。

そして、情報システムに興味を持つようになり、学外実習では銀行を選択し、一歩進んだ情報システムについて学びました。卒業研究では、大学における情報システムについて研究しました。

今にして思えば、一年生の時から興味を持ち、もっと勉強しておけばよかったと少し後悔していますが、「情報システム」について学んだということが、大学の4年間で大きな収穫の一つでした。

楽しかったこと

玉木研究室 田崎佳代子

入学式がついにこの前のように感じられ、大学生活の4年間は「あつ」と言う間に過ぎ去りました。この4年間は本当に様々な出来事がありました。

部活動、サークル、友人、学園祭、飲み会……。その中でも、友人と行った北海道への旅行は格別でした。

冬の北海道はとても寒く、時計台には情緒があふれていました。食べ物がとてもおいしく、特にラーメン横丁で食べた「みそラーメン」の味は、何度食べてももう一度食べたいようなものであり、今でも忘れることができます。また、函館で見た夜景はとてきれいで、日本海と太平洋が同時に見え、言葉が出ないくらいの絶景でした。

このような、たくさんの思い出と経験を得ることができたのは、この大学生活で出会った友人たちのおかげであり、その友人たちと一緒にすごことができた4年間は私にとって大切な宝物になりました。

4年間で得たもの

槻木研究室 刃田 直希

高校までは自由な時間のほとんどを部活動のために費やしてきた。この大学で過ごした4年間は振り返ってみると、今までよりも自由な時間が多かったせいか、非常に多くの人と接する機会があり、それぞれ

から文章では表すことができないくらい多くのことを教えられたような気がする。仲間や先生方、バイト先でお世話になった職員の方々などから、学んだ全てことは自分にとって役立つものばかりだったのではないかなと思う。様々な知識や技術など、それぞれのきっかけは違っていても、全てがこれから必要になることであり、大切なことなのではないかと感じた。特に卒業研究では忙いにもかかわらず、多くの指導を受けることができた。おかげで自分としては良いものができたのではないかなと思っている。

4年間、この大学で得られる可能性のあることのほとんどを自分としては得ることができたのではないかなと思う。自分のやりたいこと、自分にできることを自由にやることができたので、私の4年間は充実したものであったといえる。

就職

永井研究室 鈴木 寿一

私は期待と不安をたくさん抱えながら、この4年間で新潟国際情報大学で過ごしてきました。そのなかでも就職が一番大変だったと思います。それはやはり、私たちが第一期生であったからであらうと思います。先輩がいなくて、身近に頼れる人もなくとても苦労しました。また就職協定が廃止されたことも一因として挙げられることだと思っています。

私の場合は東京（関東）の企業に就職することを希望していましたので、県内企業の面接試験は受けられません。だから、県内の事情はわからないのですが、県外ではまだこの大学の名前が知られていないため、面接の度に新潟国際情報大学とはどのような大学かという質問を受けました。やはり大学の名前にこだわっ

ている企業が多いように感じて不快に思ったこともありました。しかし、私たちの就職活動のために先生方や就職課の方々の懸命な指導があったからこそ就職することができ、今の自分があるのだと思い、とても感謝しています。

「いつてきます」

原口研究室 濱口 朋

全てが楽しかった、最高だった。

未だに慣れない一人暮らし

授業をサボって釣りにいったこと

コリア語の再テスト

バイクが壊れて押して帰ったこと

文化祭のライブ

世話のやける原口先生

ギリギリだった卒業論文

短い間だったけど、彼女と過ごした日々

飯代めいて頑張ったスノーボード

そして何よりも大切な僕の友達

いやなこと辛いこともあったけど、みんなひっくるめていい思い出。

いい日があった、たくさんあった。

新潟で暮らしたこと、きつと忘れない。

もうすぐ、東京で新しい生活が始まるけど、

振り返ってみて、心から良かったなと思える生き方を見つけた。

いつてきます。

プラス思考を身につけた

樋口研究室 山岸 英仁

この大学に入学するに当たって私には、「コンピュータの知識も全く無かったし、サークルなども自分たちで結成・運営して行かなければならなく、不安でいっぱいでした。しかし最初は戸惑うことも多かったのですが、これらの課題を自己向上のためのチャンスだと思い、最後まで諦めずに頑張ってきました。このプラス思考が出来るようになったというのが、新潟国際情報大学で得た一番大きなのだと感じています。その結果、就職も自分の志望する情報処理関連の企業へ決めることが出来、サークル活動においても自分の目的を達成することが出来ました。

これから社会に出れば、もっと厳しい状況が待っているでしょう。しかしこのプラス思考が出来れば、厳しい状況も乗り越えることが出来ると思います。社会に出てから最後まで諦めずに物事に取り組んでいきたいと思っています。

短かった4年間

広瀬研究室 大橋 清夫

私が新潟国際情報大学で過ごした4年間は長かった様であるが、今思うと短かったと感じます。「まだまだやりたい事があるのにもう卒業！」と叫びたい気持ちです。

真新しい校舎で学び初めた1年次の頃には昼食時、席が空いているのが当たりまえでした。3年次になると学生で席が埋まり、もう4年次では、大学で昼食をとることを断念する程でした。入学時、あんなに広く感じた施設も学生が増えるに従って狭く感じられまし

た。学生の増え方で自分の学年が分かるという気分は、新設校の最高学年の人達だけが味わえるものです。

先輩がいないことで、伸び伸びできた反面何かと苦労もありました。しかしその苦労のおかげで、自分自身逞しくなった気がします。この4年間、良い勉強ができてとても充実して過ごせました。本当にありがとうございました。

自由だった学生生活

鷲尾研究室 小川 学

過ぎてしまうと4年間とは早いもので、「もう、卒業か」といった感じです。しかし、振り返ってみると初々しく入学してきた頃は、はるか昔のようにも感じられます。大学生活においては勉強面、生活面で様々なことを学びました。そのどちらの面についても言えることが、得ようと努力すれば得られ、得ようとしなければ得なくていいと言った自由があった点です。これから、学生生活が終わり、社会人生活への新たな一歩を踏みだしていきます。その際に今までの自由さが、かなり制限されていくと思われる。学生時代とは違うといった点を頭に入れ、責任感をもち、がんばっていかようと思います。

NUISの学びたいと

渡辺研究室 海津 智章

私は、情報、特にコンピュータへの興味から、情報システム学科を志望しました。そして、講義の内容は、コンピュータの技術などが中心なのだろうと考えていました。しかし、その考えは良い意味で裏切られました。確かに、コンピュータを使っている演習や、情報シ

ステムの理論など、技術的なことも学びました。しかし、全体的には文化的な科目など、技術的なものに偏らないカリキュラムで、幅広い分野を学ぶことが出来ました。そして、技術的な科目も基礎に重点が置かれており、技術のみに目がいきがちな情報系ですが、技術以外の視点や基礎が身につきました。つまり、大事なことは、コンピュータの技術だけ分かったことではなく、幅広い視野を持つてその技術を活用できることであり、ハードではなくソフトであり、人間であるということを感じました。

今後、社会に出ると様々なことがあると思いますが、人間が大事という根っ子の部分を大切にしていきたいと思っています。

新潟国際情報大学の

4年間を振り返って

藤瀬研究室 遠藤 祥子

大学生活4年間だけのアルバムを作ってみた。1年生の入学したての写真から、今卒業間近までの写真を古いものから順番に並べてまとめた。多かれ少なかれ皆の顔が変わっている。10代から20代になる時期なので当たり前なことではあるが、中身も少しは変化しただけかというのが重要な点である。外見は努力次第で少しは変えられるかも知れない。女性の場合は特に化粧や髪型などで変わる。しかし内面はどうだろう。のほほんと生きていけばのほほんとした人間にしか育たないのであって、色々な修羅場を乗り越えていくこそ人間性は確立していくのだと思う。そしてまたその人間性によって顔付きも変わっていくのであって、やはり内面を磨かないことには外見もそれほど変わらないものであると思う。

人生の1/4以上がもう過ぎたのに自分はさほど成長したとは思えない。皆の顔も自分の顔も、社会生活が慣れた頃にはお互いに変わったネ、キレイになったネ。」と言いつけるよう努力すべきであり、またそれがこれからの楽しみでもある。



多くの友人達との思い出

宗澤研究室 熊倉 由記

大学での一番の思い出は、友人と過ごした日々である。大学に来ればいつも同じ顔ぶれが私を待っていることが、楽しかったし、嬉しかった。あまり大学に人が来ていないと、電話までして召集をかけてくる人もいた。みんなで集まり、たわいもない話をして、朝まで飲み続けたにもかかわらず、全然酔わない人もいた。またある時は、海へ行って黄昏れまで遊んだりもした。あんなに海が好きなら人も珍しい……テスト前には、出席の悪い私達に、親切に教えてくれる人もいた。誕生日には、彼氏と一人で過ごさせたりはしないで、みんなでお祝いをした。なにしろ、みんな騒ぐことが大好きだった。

春には花見や新歓で新しい人と友達になったり、酔っぱらって人に迷惑をかけたりする人が続出した。夏には、バーベキューや花火をしたが、ビールを持って来る係りなのについてたように大遅刻をしる人もいた。秋には学園祭でたこ焼き屋に精をだし、イベントで盛り上がり過ぎて、救急車で運ばれた人もいた。冬にはみんなでスノーボードに駆け付けた。そり大会 J-MIXは今後の課題である。

私達には、四季折々の楽しみがあった。そんな友達と別れるのはとても寂しい。でもいきなりロシアに留学して、大学にもう一年残る人もいる。

友人と過ごした大学時代は、私の一生の思い出となることであろう。そう、そう、そう、又私の口癖がでちゃった。

第一回

松井研究室 渡辺 英明

入学式の前日は、とてもよく晴れた日だった。そこで、自転車に乗って大学まで行ってみることにした。全く知らな

い道だったので迷ってしまい、結局大学まで1時間もかかってしまった。大学のまわりを見ると、同じように大学を見ている人がいた。話しかけてみると同じ入学生であることがわかった。前日に引越して来て一人暮らしをはじめたばかりだったので、新しく知り合いができてうれしかった。これが、大学生活の第一日目だった。

この時に比べると、大学生活の4年間を通して友達が増え、また、不安ばかりだった自分自身もひとまわり大きくなったように思われる。一から新しくつくっていくという新設大学の環境が、自分自身により影響を与えていたのだと思う。

全体を視野に入れて

松崎研究室 三上 勲

私が大学生活で、一番印象深く残り、そして今後の糧となったと思うことは、卒業論文「米農業システムとその周辺について」に関する活動です。一年以上かけて何かをする、という経験と、複雑な社会構造に直接接するという経験の融合は、とても刺激的なことでした。

巨大な農協組織について、関連する組織、政府の政策、法律などがさまざまな形で関わっていて、直接米生産に関わる方、流通組織を総括している方、役所の方など、多くの方に取材させて頂きました。

そういった調査結果を考察していくうちに、各個の知識のみでは分らない重厚な全体像が見えてきた、ということに、衝撃的な感動を覚えました。

これから私も社会の一部を担っていくわけですが、この大学生生活で学んだことを基本に、常に自分は社会の一部であることを認識し、自分の推察とは違った「全体」が存在する、ということを念頭に置いて、今後の人生を自ら開発していきたいと思っています。

湧 YUUGEN 源

編集後記に代えて

広報委員長 會田 彰

誕生四年の春がついに回り来て、新潟国際情報大学第一期生の晴れの門出のときが参りました。角田おろし（風）の吹き抜ける荒寥たる大地を、「希望の革命」の地とすべく頑張った君達は立派でした。そう、君達はパイオニア、諸君こそ、新しい時代の扉をひらく

「アントレプレナー」（市民的起業家）なのだ。私自身、開学以来諸君と付きあつて、明るく純真でいい学生だと思っていました。だが同時に、情けないくらい幼く頼りないとも思っていたのですが、それが二、三年すると見違えるくらい逞しくなり、最後の追い込みの就職活動、卒業研究で見せた君達のねばりは、「すごい」の一語に尽きるものだった。

『国際・情報』第四号は、卒業祝賀号にしました。三四人の諸君から、卒業奮戦記を寄せて頂きました。謙謙の美徳のせい、自己批判、自己反省の言葉が多いが、その下に、自律、自己責任、チャレンジ精神を修得した自信と自負が語られている。内山学長の自由闊達の中で歴史の創造に参加すべしという祈願が、目立たぬが確実に諸君の中に染み込んでいる。諸君は後輩の為に伝説を残してくれた。いま、諸君が出て行く日本の社会は、「ビッグバン」ということばで象徴される大転換、大波乱、歴史の断層のときにあります。ビッグバンが必要なのは、金融システムだけでなく、官庁、企業、産業構造、学校教育、地域コミュニティ、学問研究システム等々すべての分野に及んでいるというべきでしょう。立花隆氏の言うように、「グ

ローバル・ブレイン」であるインターネットが齎したコミュニケーション革命が、社会を、すべてが連鎖・連動する「複雑系」にしたからです。悲観主義者には、これはすぐ、「連鎖倒産」を想起させ、大失業時代の恐怖で脅かします。

だが、これは、わが国については、九一年から始まった十年デフレの最終局面がきたこと、つまり、夜明けが近いことを知らせるものです。そして、夜明け前は一番暗いときです。痛みは避けられない。要は我々が痛みを耐えて生き抜く力をもっているかなのだと思います。

面白いことに、いま、世界の最先端科学のキーワードになっているのが「複雑系」の科学という言葉なのです。歴史の特異点ともいえる激動の現代に、人類は、にわかに現代の知識の無力に気が付いたが故に、知のビッグバンともいべき「パラダイム革新」の必要を説く人が続出するにいたつたのです。

世界の震源地はアメリカ「サンタフェ研究所」ですが、東大駒場のキャンパスにもいわゆる「先端研」（先端科学技術研究センター）が設立されています。

本号では石川真澄先生がご自身の長いキャリアを披瀝下さり、理系、文系、の枠を超えて、いわばバリエーションに知を磨くことが、生きた知のために不可欠なことを教えていただきました。同じく正田先生も、ビジネスマンの大先輩として、懇切な実業人ライフ指南のことばを綴って下さいました。恐れることはない、所属する会社、組織、地位、学歴、それにぶらさがって安住しておれる時代は終わった。自分の内なる生きる力、英知、それを社会のために活用するノウハウ、絶えずそれを鍛えて生きて欲しい。「風雪厳しかるべし」卒業生諸君の健闘を祈ります。